

保育者が子どもの経験の見通しをもつ

2. 考え、見通し、想像する心 ~オタマジャクシの成長を見つめて~ 北区立うめのき幼稚園（東京都北区）

「心を動かす自然体験」を保育に取り入れる中で、見えてきたこと

4歳児では…

- ◇入園当初の子どもたちは、自然物を見たり触れたりして不安定な気持ちを和ませる。自然物に触れて驚き、不思議さ、面白さなどの感動を味わうことが、興味・関心の芽生えへとつながる。
- ◇自然物との出会いが基になって、興味・関心が広がり、対象に継続して関心を寄せ、かかわるようになっていく。
- ◆出会いのきっかけをつくり、驚きや喜びなどの感動をともにする保育者の存在が重要である。

5歳児では…

- ◇1年間の体験から、4歳児のときとは違った見方やかかわり方ができるようになる。
- ・成長（生長）や変化を予想し、期待をもちながら対象にかかわる姿
- ・見通しをもって試し、進んでかかわる姿
- ・生き物に対する優しい眼差しや思いやりの姿
- ◆経験を積み重ね、より深く対象にかかわりながら、自然物と触れ合う喜びを感じられる保育者の働きかけが大切である。

『科学する心』は、心を動かす自然体験を継続的に積み重ね、「あれ？なに？ふしぎ！」の思いを味わう中で育っていくものとする。

このことを具体的な事例を通して検証してみたいと考えていたところ、保育者が「カエルの産卵を観察する」という感動体験をした。その保育者は、自分のこの感動体験を「子どもたちにも体験させたい」という思いから意識して保育にも取り入れ、例年出てくるオタマジャクシやカエルの活動を、「心を動かす自然体験」として展開し検証していくことにした。

子どもの経験の見通しをもつ

<研究の構想（抜粋）>

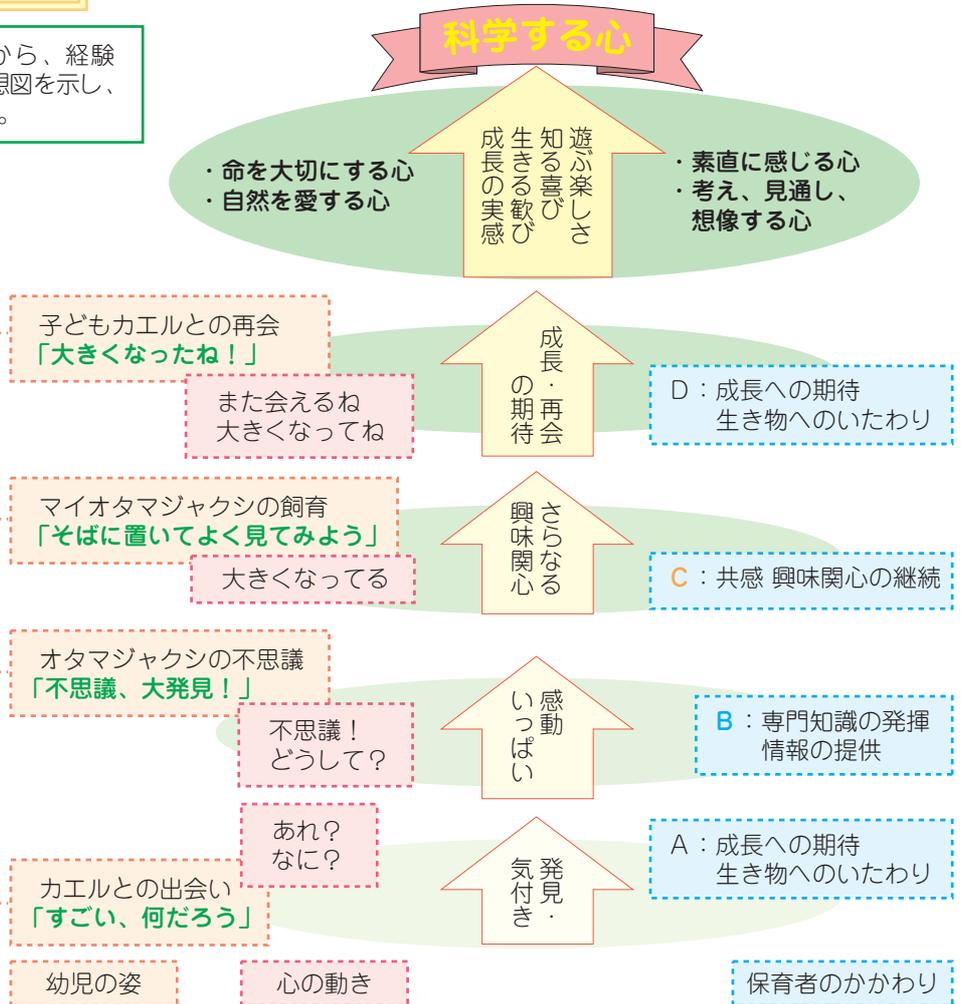
例年の子どもたちの実態から、経験の見通しを基にした研究の構想図を示し、共通理解を図り実践を重ねた。

事例4 小さなカエルを見つける。「逃がしたカエルに会えた」「大きくなって」と再会の喜びを感じ「もっと仲間がいるのでは？」と想像し探す。

事例3 関心が高くなったので、自分のペットボトルでオタマジャクシを飼育する。体や食べ物の変化に気付いたり成長を期待したりする。

事例2 オタマジャクシの変化に気付き観察を楽しむ。血液の流れや後ろ足の指など、顕微鏡で見たりカエル博士に話を聞いたりする。

事例1 カエルの産卵の様子を見る。お尻から卵が出てくる様子に感動する。



事例5 「カエルのうんち、虫が出てきた！」～カエルの食べ物を知る体験～ 4・5歳児 9月10日

雨上がりの園庭で虫探しをしていた5歳児3人がカエルを見つけた。並んだプランターを動かすと、あと2匹出てきた。「カエル3匹見つけた」の声に近くにいた4歳児が集まってくる。3日前に同じ場所で見つけて、おしっこをかけられて大騒ぎしたばかり! 『また、ここにいたんだ』…

| 自然体験の積み重ね | 子どもの姿・言葉 | 保育者のかかわり・援助 |
|--|--|---|
| <p>○プランターの所で見つけた3匹のカエルの様子をみんなで見る。</p>  <p>○足洗い場に連れて行って放す。</p> <p>○カエルを角形たらいに移し、水を入れて動きを見る。</p> <p>○カエルがうんちした場面を見る。</p>  <div data-bbox="159 1422 422 1657" style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content;"> <p>水面に浮いている虫。他の黒い浮遊物もフンとして出た物</p> </div> | <p>○見つけた5歳児の他にも4・5歳児が6～7人集まってきて、カエルをのぞき込む。</p> <p><感動・興奮></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「すごい! 3匹もいる」 ・「跳んだ! カエル跳びだ!」 ・「あっちは茶色だ」 ・「こっちは黒くて白い線がついている」 ・「同じ色だからきっと兄弟だよ」 ・「こっち(プランターの陰)にすぐ隠れちゃう」 ・「こっち(プランターの陰)が好きなのかな」 <p>○しばらく発見した場所で見えていたが、見つけた5歳児は、カエルを持って園庭の足洗い場の所に行くと、そこに放してカエルが跳ぶのを見る。</p> <p>他の幼児も後に付いて行き、一緒に見る。</p> <p>○たらいを見ると、4歳児が喜んで水を入れ、カエルを移してみんなで見ている。そのうち…</p> <p><気付き、驚き></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「わあ、うんちだ! 先生、うんちだよ!」 ・「違うよ。カエルのうんちだよ」 ・「カエルを持ったらうんちが出てきたんだ」 ・「アリ、カもいる」 ・「これは? 動いている!」(ゴミムシらしい) <p><推測></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「のんだんだ! そうだよ! だって、かんでたら口から逃げちゃうじゃない」 ・「私のうんちはまぜまぜになっているよ!」 ・「それに臭い!」 | <p>C : 一緒に見ながら、よく見たり考えたりするきっかけになるような言葉を掛ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ほんと、よく気がついたね! 3匹とも体の模様が少しずつ違うね」 ・「カエルは暗いところの方が、いいのかな」  <p>C : 足洗い場からすぐに飛び出してしまうのを見て、もっと見やすいように大きい角形たらいを出す。</p> <p>C : 幼児の知らせを聞いてたらいを見ると、水面にたくさん虫が浮いているので事実を確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「だれかここに虫を入れたの?」 ・「えっ、ほんと? じゃあ、これはカエルが食べた虫なんだね。どんな虫がいる?」 ・「これね、何だろうね。本で調べてみようか」 <p>B : 素朴な疑問を考えるきっかけをつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「“うんち”なのに、どうしてそのままの形で出てきたんだろうね?」 ・「そうか、だから飲み込んでしまうのか」 |

○偶然の出来事から知ったカエルの食べ物や体の働きなど生態に関する情報は、幼児にとってだけでなく、保育者にとってもインパクトのある発見であり感動であった。その驚きがさらに周囲に伝わり、思ったことを話したり考えたり、さらに、自分との違いに気付いている。

ポイント

保育者は自身の感動体験を活かして、子どもたちのカエルやおタマジヤクシとの出会い方やかかわり方を工夫しています。保育者の感動体験は、子どもの生活に結びつくことが分かります。

保育者がカエルの産卵の感動体験を子どもたちと共有し、例年の実態から経験の見通しをもって、子どもの思いに応じて環境や指導の工夫を図ったことが、カエルの排泄物にも注目してカエルへの理解を深めたり新たな発見をしたりすることに結びついています。